

男の白鳥は美しいか

『Matthew Bourne and his Adventures in Dance : conversation with Alastair Macaulay』

Matthew Bourne and Alastair Macaulay 著 / Faber and Faber

DVD 『Swan Lake : Matthew Bourne』

kultur Video

DVD 『Billy Elliot』

Universal

DVD 『リトル・ダンサー』

スティーヴン・ダルドリー監督 / ジェネオン・ユニバーサル

バレエの専門書である。しかも、洋書で厚さ6センチ、700ページを超える大著、電話帳のようなボリュームである。このような本を本学の学生が読む機会は、まづないと思われるので、あえて紹介することにした。

筆者マシュー・ボーンは英国の振付家で、現代バレエだけでなく古典作品を独自の解釈で振付し、多くの作品を世に送り出してきたが、代表作は何と言っても「Swan Lake」つまり白鳥の湖である。「なんだ、有名じゃないか、誰でも知っている」と思うなかれ。舞うのは男の白鳥である。面白おかしいグランディエーバやモンテカルロと間違えないで頂きたい。こちらは真面目な芸術である。バレエ作品多しといえど、この作品ほど好悪が分かれるものはない。魅了され虜になる人がいるかと思えば、絶対に受け入れられない、許せない、なぜ古典バレエの名作中の名作をこんな風にしてしまうのかと強い嫌悪を示す人もいる。現代バレエにおいてインパクトの強さでは断然トップだろう。なにしろ白鳥たちは全員白塗りの男性、上半身は裸、下半身は羽根のような翼のような不思議なコスチュームをつけている。つまり、ダンサーたちの筋肉がこのバレエの衣装なのだ。本著は、このような作品を世に送り出したボーンの本格的なバレエ理論と芸術論である。アラステア・マカレイとのインタビュー形式で記述されているが、シェイクスピアに始まるイギリスの舞台芸術の伝統と歴史があるからこそ、現代の「Swan Lake」が生まれたことが良く分かる。

古典の「白鳥の湖」は、悪魔によって白鳥に化身されたオデット姫と王子とのロマンスがテーマである。第二幕で王子は黒鳥をオデット姫と誤解し愛を誓い、第三幕で絶望したオデット姫は自死するという悲劇、または誤解が解けてハッピーエンドという二種類の物語になっている。マシュー・ボーンの「Swan Lake」では王子が主役と言ってよい。物語は王子の孤独から始まり、それは白鳥との出会

いにより愛と歓喜に変わる、しかし、王子は白鳥を裏切り、最後は狂気の中で死を迎えるという王子の内面が物語の中心である。宮廷の中で退屈な生活を送っている王子は宮廷の外にも出てみるが、そこで見たものは人々の嘲笑と蔑みであった。すべてに絶望し、湖に投身しようとするが、その時突然、目の前に美しく大きな白鳥が現れる。彼は白鳥の群れを率いるリーダーのようでもあり、象徴のようでもあり、もしかしたら白鳥の王子かもしれない。雄々しく誇り高く、王子を誘うようであるが、一歩でも近づこうものなら手ひどく拒否する。それでも、王子は白鳥に強く魅了され、徐々に白鳥も心を許し、ついには愛に至る。第二幕では黒づくめの男が登場するが、王子が恋した白鳥に酷似していたため、王子は白鳥を裏切り、この男に恋してしまう。ここまでのストーリーは古典とほぼ同じだが、第三幕は大きく異なる。寝ている王子の枕元に亡霊のように次々と白鳥たちが現れる。眠っている王子は気付かないが、舞台を見ている聴衆にとっては次第に数を増していく白鳥は怖い存在だ。この場面について、著者はイギリスの映画監督ヒッチコックの「鳥」に触発されたと述べている。それはこのような場面だ。主人公の女性が小学校のジャングルジムを背に煙草を吸おうとしている。最初はカラスが一羽ジャングルジムに止まるが、女性は気がつかない。そのうちに二羽、三羽と止まり、次々と増えていく。女性がふと振り返ると、ジャングルジムはカラスで真っ黒になっている。映画の中の人物が気付かず、映画を見ている者が気付くという手法は見事で、観客の恐怖を掻き立てる名場面である。ポーンはこれをバレエで演じて見せた。

ラストシーンはバレエ史上ないほどの悲劇である。白鳥たちの怒りは、王子と王子を愛した白鳥の両方に向けられる。彼らは王子を容赦なく叩きのめし、王子を助けようとする白鳥を喰い殺す。ここでの白鳥たちは美しい鳥ではなく、動物的本能に満ちた野生である。動物であるがゆえに、純粋で妥協がない。ポーンは白鳥を暴力的で美しく力強く描いて見せている。

白鳥の描き方だけでなく、ポーンの独自の考え方も本書からわかる。バレエは非現実の世界を創り出すもので、通常、聴衆がうっとりするような容姿のダンサーが舞うものだ。ところが、この作品にも登場する多くの人物はいわゆる美男美女

ではない。酒場のシーンに出てくる人々は、何となくどこかで見たような人ばかりだ。この点について、ボーンは「観劇している一人ひとりにとって、舞台上の人物の誰かが自分の投影であるという作品にしたい」と述べている。

孤独な王子と母親である王妃との冷たい親子関係も今日的なテーマである。また、王子のスキヤンダルを追うパパラッチが登場するが、現代のイギリス王室とメディアの関係を示唆するものであるように見える。白鳥と王子の関係は男性同士の愛であるが、古典バレエには同性愛をテーマにした作品はないように思う。

このように、ボーンの作品は興味が尽きないが、いくらバレエの専門書を読んでも、実際の舞台を見なければ意味がない。バレエなんて一生見に行かないという人はDVDの「Swan Lake」を見てはいかがだろう。それも抵抗があると言う人は、BBCが制作した映画「Billy Elliot」(邦題：リトルダンサー)をお薦めする。多くの賞を取った秀作で、イギリスの片田舎にある炭鉱で育った少年がバレエダンサーになっていく物語である。少年は早くに母を亡くし、父親と兄は貧しい鉱山労働者で、芸術や文化にはおよそ縁のない生活環境である。ある日、ふとしたことから少年はバレエに興味を持ち、こっそり練習に通うようになるが、それは父親の激怒をかう。「バレエなんて男がするもんじゃない。恥ずかしい。」「なんで、男がバレエをやってはいけないんだよ。」という二人のやり取りは、まさに男性バレエに対する社会の両極端な見方を象徴するものだ。映画は二人の相克が中心であるが、ついに、父親は少年の情熱に負け(あるいは愛情ゆえに)、家中の金目のものを質に入れ、少年にロイヤルバレエのオーディションを受ける機会を与える。そこからストーリーは一気に飛び、大人になった主人公がマシュー・ボーンの「Swan Lake」の舞台裏で出番を待っている場面が変わる。息子の晴れ舞台を観るために父は生涯で初めて劇場に足を運ぶことになる。チャイコフスキーの壮麗な音楽とともに、主人公が力強い跳躍で舞台に踊り出るショットで映画は終わる。ストーリーもテーマも音楽も秀逸だが、客席で見ている父親の表情が良い。役者というのはこのような表情ができるものなのかと、何度見ても胸を熱くする。つまり、映画は男のバレエを全面的に支持し、肯定しているのだ。男の白鳥、大いにけっこうではないか。

執筆紹介

柴崎 秀子

基盤共通教育部教授。専門領域は、第二言語習得研究。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『Matthew Bourne and his Adventures in Dance : conversation with Alastair Macaulay』 Matthew Bourne, Alastair Macaulay著 Faber and Faber 2011年 3,703円

【DVD】『Swan Lake : Matthew Bourne』 Kultur Video 2012年 3,868円

【DVD】『リトル・ダンサー = Billy Elliot』 スティーヴン・ダルドリー監督 ジェネオン・ユニバーサル・エンタテイメント 2013年 1,543円

[ブックガイド目次へ](#)